

〈論文〉

近代におけるフルンボイル地域の形成

—「バルガ」から「フルンボイル」になるまで—

イミン

The Formation of the Hulunbuir Region in Modern Times:
From “Barga” to “Hulunbuir”

EMGENUUD IMIN

Hulunbuir was a League of Inner Mongolia Autonomous Region of the People's Republic of China. Until the early 20th century, Hulunbuir was known as Barga by non-residents. Gradually, however, the relation between Barga and Hulunbuir changed, influenced by the complicated political situation and international relations, including the early-20th century Mongolian independence movement. As the result, Barga, the name of one Mongolian ethnic group, came to be known as Hulunbuir from the Manchukuo era, i.e., from the mid-1930s, onward. In 1948, Hulunbuir became a district of the Inner Mongolia Autonomous Government, and the league of Hulunbuir was formed.

はじめに

「フルンボイル」は中国内モンゴル自治区の一行政区であり、同自治区の東北部に位置する。その名は、そこにあるフルン湖とボイル湖の名称に由来する。漢字表記は「呼倫貝爾」で、従来日本語で「ホロンバイル」、「コロンバイル」や「フルンボイル」などと記されてきたが、最近ではほぼ「フルンボイル」で統一している。本研究では、フルンボイルを地理的用語として、また政治的行政区画として使用する場合もある。「フルンボイル」は、満洲国時代は「興安北省」、1948年には内モンゴル自治区の前身であった内モンゴル自治政府の「フルンボイル盟」となり、2001年から内モンゴル自治区「フルンボイル市」となった。

それに先立ち、フルンボイルは、清朝時代は、「内モンゴル」と「外モンゴル」のどこにも属さず、独自の歴史を有する地域であった。

フルンボイルは歴史的に様々な遊牧民族の生活の場となり、モンゴル民族の発祥地でもあるが、フルンボイルに長期にわたって生存し、住み着くに至った民族集団は少なかった。清朝時代になり、辺境防備体制の確立とそれに伴う辺境民の組織化が行われ、バルガ、ダグール、オロチョン、ソロンなど遊牧民と狩猟民が移駐されてから、フルンボイルはこれらの民族集団の分布地となり、その主な集団であるバルガの名で呼ばれ、また、そう認識されていた。

「バルガ」はモンゴル民族の中の一支部であり、

その起源は『隋書』に見られる「拔也古」まで遡ると考えられている。バルガの漢字表記は「巴爾虎」であり、20世紀初頭における日本語による調査報告では漢字名で記されることが多く、特に地域名として認識された時は漢字で表記され、民族やエスニック・グループとしての「バルガ」はカタカナで表記されることが多かった。バルガ族はフルン湖とボイル湖地帯からバイカル湖周辺まで広く分布し、狩猟と遊牧を営んできた。現在もモンゴル諸族の中で遊牧の伝統的生活文化がもっともよく維持されている一族として知られ、中国とモンゴル国及びロシアに跨って分布し、異なる国家体制のもとで異なるライフスタイルをもって生活している。

「フルンボイル」という名称は清朝時代から使われはじめ、当時のフルンボイルの範囲は、清朝「八旗制」によって創られた地域に留まり、現在のフルンボイルの西部と西南部に当たる。そして、1732年にブトハ地区から移住させられてきたソロン、ダグール、オロチョン、バルガ壮丁3000名とその家族、また、2年後にハルハ（外モンゴル）のセツェンハン・アイマゲから移住させられてきたバルガの2984名がフルンボイルの最初の住民で、彼らに与えられた分布地が「フルンボイル」であった。現在のフルンボイルはその範囲が当時より東に拡大されている。本文で述べるようにフルンボイルは多民族地域と認識され、そのような視点から行われた研究も多い。

本稿では、モンゴル民族の一支族でありながら、その名がフルンボイルに分布していた諸民族の総称として使用され、さらにそれがこれらの民族集団の生活空間であったフルンボイルを指す意味で使用されていた「バルガ」について分析した。また、「バルガ」と「フルンボイル」との関係、さらに、バルガとほかの民族集団間との関係、特に、バルガとフルンボイルのダグール人の関係に焦点を絞ることによりフルンボイルにおけ

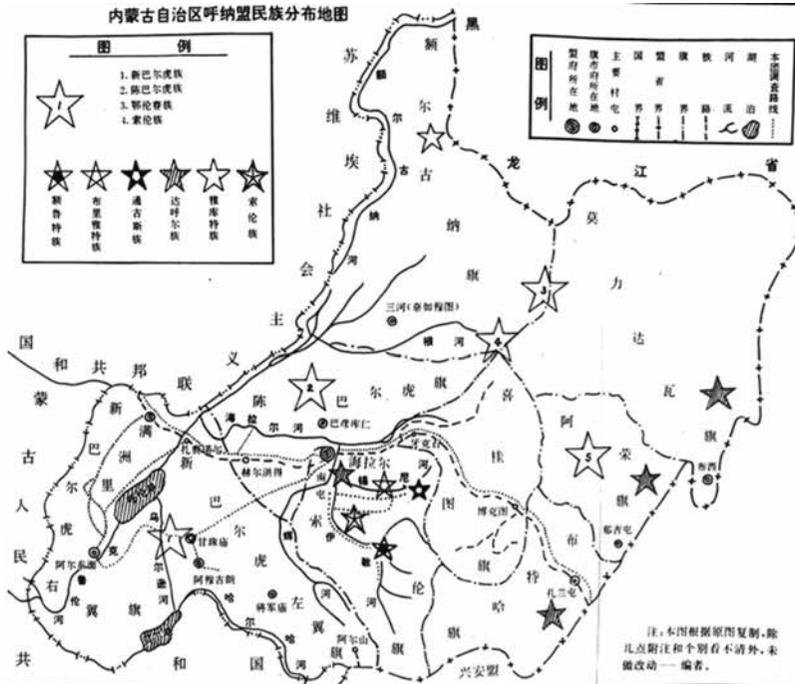
る民族関係を考察し、それにより、地域としてのフルンボイルがいかにか形成されたかについて論述する。1911年に、清朝崩壊直前というタイミングで、フルンボイルがどのような道を歩むべきかを選択しなければならなかった時、バルガとダグール人は重要な役割を果たした。それはその後のフルンボイルの歴史においても同様であった。そのため、バルガとフルンボイルのダグール人の各々を対象にした歴史研究は多いが、両者の関係、特にそれがその後のフルンボイル地域の形成に与えた影響及び、それがどのような歴史的意義をもつものであったかについての研究はまだない。

このような考察を踏まえ、本稿では、モンゴル民族の一支族であるバルガの支族名称がいかにかそのエスニシティを失い、政治性が強化される中で行政名称化され、バルガが地域としての「フルンボイル」に変化したのかというプロセスを、清朝時代から満洲国時代におけるフルンボイルの歴史を概観することにより明らかにする。

1. 先行研究

フルンボイルの歴史において、フルンボイルが抱えていた複雑な問題が研究者の注目を集めていたため、フルンボイルについての研究は歴史研究が中心であった。20世紀初期から、特に日本人がフルンボイルへ足を運ぶようになり、現地調査を広く実施していた。1906年に関東都督府が置かれ、同年南満洲鉄道株式会社が設立され、その関係者によるフルンボイルでの調査が全面的に展開された。その調査の報告書としての研究成果は当時のフルンボイルを知る上で重要な資料になっている。

そして、1930年代初期まで内モンゴルの政治に影響を与えたことで知られているフルンボイル出身のダグール・モンゴル人の郭道甫（メルセ）は、『呼倫貝爾問題』（1931）という著作を執筆し



地図1 内モンゴル自治区呼納（フルンボイル）盟民族分布地図
 出典：燕京，清華，北大1950年暑期内蒙古工作調査団編（1997）

た。それはフルンボイルに関する歴史資料として、また、現地のモンゴル人が書き残した資料として重要である。

日本の敗戦後、フルンボイルは「フルンボイル自治政府」、「フルンボイル臨時地方自治政府」を経て、前述の通り、内モンゴル自治政府の中の「フルンボイル盟」となり、さらに1949年に中華人民共和国成立以降、内モンゴル自治区の「フルンボイル盟」として定着し、現在は「盟」が「市」に変更され、「フルンボイル市」となっている。中国の改革開放に伴い、1990年代以降、日本人または日本語によるフルンボイルについての研究や調査も再開された。その代表的な研究として、ユ・ヒョジョン（1999）は、内モンゴル自治区の中で少数民族が最も多いフルンボイル盟の民族構成と多民族社会の現状について考察し、さらに中国における民族政策の下での少数民族の生活、教

育などに注目しながら、フルンボイル盟の民族的生活の枠組と変容について研究している。また、吉田順一（1999）は、満洲国建国以前から日本人が行っていたフルンボイルでの調査、特に、畜産調査を中心に考察し、そのほか幅広く行われていた調査についても取り扱っている。

フルンボイルの諸民族集団に関する研究としては、まず、清朝時代、バルガ人がフルンボイルへ移駐させられた経緯とその後八旗制度*1のもとで編成された歴史については柳澤明*2の研究が知ら

*1 「八旗制」とは、もともと満洲人の前身である女真人の独特な軍事・行政組織であり、ヌルハチによる女真諸部の統一後、次第に拡大されていった。基本的に満洲（女真）人を対象としていたが、建国初期において清に「来帰」したモンゴル人、漢人にも適応された（ユ・ヒョジョン2002）。

*2 柳澤明（1993）と柳澤明（1999）がある。

れている。また、ダゲール人に関してはユ・ヒョジョンの研究^{*3}があり、1950年代から中国で実行された「民族区域自治」政策による「民族識別」の結果として、それまで「モンゴル族」として認識されていたダゲールが一つの民族として認定されるまでの経緯と自治を獲得したプロセスを政治学の視点から検討している。近年は、ダゲール人自身により、近代におけるダゲール人の政治活動を中心に、また文化的な変容からダゲール人としてのアイデンティティに関する研究がなされている^{*4}。

一方、バルガ人自身の研究は、歴史や文化、または歴史人物に関する研究に焦点が当てられている。2006年と2007年に、モンゴル国とフルンボイルにおいてそれぞれ「バルガ研究協会」が設立され、バルガについて研究が本格的に行われるようになった。歴史、文化についての研究と歴史的人物の伝記がほとんどであるが、20世紀のバルガの歴史については、モンゴル国の学者による研究が多い。代表的な研究として、Г. Мигмарсамбуу (2007)、Г. Мямарсамбуу (2018a)、Г. Мямарсамбуу (2018b) が挙げられる。

さらに、イミン (2019) は、20世紀初頭のモンゴル民族の独立運動を故に、現在モンゴル国と中国の国境に跨って暮らしているバルガの民族と国家アイデンティティのありかたについて考察している。それにあたり、20世紀におけるモンゴル民族の独立に関するダムディンスレンの考え方や行動について検討し、ダムディンスレンに対する当事者や関係国からの評価について分析し、民族自決や国民国家の形成が世界的な流れとなった20世紀に、国際政治の強い影響を受けたバルガ・モンゴル人の「民族」と「国家」の実態を捉える

というより新しい視点からの研究を進めている。

中国ではフルンボイルの歴史や民族関係などが学界においても、政治的にも強調されている場合が多いが、実際、その関連の研究はそれほど多くないのが現状である。特に、社会学的な視点からの研究は少ない。

2. 20世紀初期までのフルンボイル

清朝時代から「フルンボイル」は、東及び南東は興安嶺分水界を以て境界となし、南と西とは外蒙（外モンゴル）に境を接し、北は西比利亚（シベリア）に臨んでいた^{*5}。当時、フルンボイルの人口の多数派を占め、また「バルガの草原」の一部となる現在のモンゴル国領内にある「メネン・タラ」を含め、この茫漠な草原に遊牧していたのはバルガ・モンゴル人だった。そのため、「バルガ」とは「フルンボイル」を指す場合が多く、戦前バルガの地を訪れた日本人の研究者や学者らもそのように記していた。そして、後述するようにハルハ（外モンゴル）のモンゴル人とロシア人もフルンボイルを「バルガ」と呼んでいた。

「フルンボイル」という名称は、前述の通り、1730年代にバルガ、ソロン、ダゲール、オロチョンの諸民族がフルンボイルに移住させられてから地名として公式に使われはじめた。そのため、これらの民族集団が「フルンボイル」という地域の誕生に、最初から関わったことになる。

まず、1732年に大興安嶺以東のブトハ地区から移住させられた人たちは、「ソロン八旗」として組織された。移住の際に、各壮丁には階級に応じて馬、牛、羊数頭ずつが定着のための資本として与えられた。彼らには、一般のブトハ壮丁とは違って兵としての義務が課される一方、他の一般の駐防八旗とも異なって、平時は散居して遊牧・

* 3 ユ・ヒョジョン (2009)。

* 4 主に暁敏 (2007)、暁敏 (2008) と暁敏 (2009) が挙げられる。

* 5 オウエン・ラティモア、後藤富男訳 (1934) 131 頁。

狩猟を行っていたのである。ただし、このうちダグール人は、気候条件が厳しく、農業に適さないということで、1742年にほとんどがブトハに戻り、官職にあった一部分だけが残った*6。そして、20世紀初頭のフルンボイルの歴史や政治舞台に活躍したのは、この時に残ったダグール人の子孫である。

一方、バルガ人の移住は二回にわたって行われた。その区別をするために、1732年に移駐された一部を「ホーチン（陳）・バルガ」、2年後にハルハのセツェンハン・アイマグから移住させられたバルガ人を「新バルガ」と呼び、「新バルガ」も同じ八旗制により組織された。両バルガは元来同じくバイカル湖畔から出てきた人たちであるため、本来は区別が存在しないはずであった。しかし、両バルガが黒龍江とハルハの所管に分かれて約40年になり*7、特に文化上の差異が著しくなった。ホーチン（陳）・バルガはシャマニズムを信仰するのに対し、新バルガはハルハの影響下にあった関係で仏教の浸透が強い。このような宗教的な差異は、またそれぞれのアイデンティティやエスニック・グループとしてのあり方にも影響を与えていると考えられる。

清朝政府は、新バルガと陳バルガ、ソロンなど諸部を八旗により組織し、左、右翼に分け、これらの管轄を担うフルンボイル統領を設置し、1743

年に、統領を副都統に改めた*8。この副都統衙門はフルンボイルにおいて地方政府となり、政治組織の担い手であった。補足すると、清朝政府がモンゴル地帯全体を行政的に「外藩蒙古」と「内属蒙古」の2つに分けた中で、フルンボイルは後者に分類され、前者と違ってジャサク（旗の長）をもてず、朝廷から派遣された都統により統轄された*9。

上記の民族集団がフルンボイルに移住させられた1732年から1900年代までの約170年間は、社会的も経済的にも平穏な時代であった。さらに、清朝政府がフルンボイルへの漢人移民を禁止するなど閉鎖政策を取っていたため、フルンボイルは外来者から守られ、内モンゴル自治区の他の地域に比べ、漢文化の影響を受けた時期が遅かった。

3. 20世紀初頭のフルンボイルとダグール人の政治的活躍

20世紀初頭、辺境の管理に危機を感じた清朝の支配層はモンゴルに対する政策を根本から変え、フルンボイルもその対象となり、それまで見過ごしてきたバルガ族の自治的な状態に手を付けはじめた*10。まず旧制度を変えるため、1905年にバルガの国境整備兵を漢人の役人に代え、1909年に100年間続いた副都統を撤回し、フルン道を設けた。次に、1907年から「移民実辺」を導入し、漢人農民を入植させ、放牧地を農耕地に転換させるとした*11。このような変動に反対し、それを阻止するため、フルンボイルの官吏たちは、まず清朝政府と交渉し、新政策の撤回を申し出て、それが拒否されると直ちに武装蜂起を起し、独立を宣言するに至った。

そして、従来の自治の回復から独立を検討し、

* 6 ユ・ヒョジョン (1999), 151 頁。

* 7 1688年に西部オイラト・モンゴルのジュンガルのガルダンがハルハに侵入し、ハルハ諸族の多くが南へ内モンゴルに逃れて清朝の庇護を求めた際、バルガ族もこの混乱に巻き込まれていくつかの集団に分断された (柳澤明 1993, 47 頁)。1697年に、内モンゴルに入っていたハルハ・モンゴル人が帰郷する際に、バルガ人も同行し、セツェンハン・アイマグの旧主の支配下に留まった。また、バルガ人の一部が東に黒龍江流域へ移動し、黒龍江将軍に収容された (Galjud Tübšinnim-a . 2013, p. 61-70)。

* 8 盧明輝 (1990) 64-65 頁。

* 9 フフバートル (2012), 42-43 頁。

* 10 田中克彦 (1990), 50 頁。

* 11 奇文瑛 (2001)。

さらに実現させるまでのプロセスの中で、各民族集団がどのような立場から、どう参加していたかを考察する必要が生じている。関連資料や研究などによれば、バルガとダグール人がこの過程に重要な役割を果たしたことがわかる。しかし、研究者や執筆者の立場によって、異なる主張をする傾向がみられ、実際にバルガとダグール人両者がどのような立場から行動したか、また、その関係性が曖昧である。

清朝に帰服してから、フルンボイルの政治、経済両面において指導的な立場にあったのがダグール人であった。彼らは精力的で、能力も有する上、公務に携わる伝統を有していたからである。そのため、清朝新制度の導入は、ダグール人の政治的な地位の弱体化と喪失を意味していた。それに危機を感じたフルンボイルのダグール人たちは、同じころ外モンゴルで行われていた独立運動に呼応する形で、バルガ人とともに独立を宣言した。最初は、「反対共和、復興清朝」（共和に反対し、清朝を復興させる）というスローガンを掲げていたが、清朝国内の形勢を悟り、外モンゴル政府に帰順する道を選んだ^{*12}。

そのころ、フルンボイルの独立を指導した人物としてよく知られていたのは、バルガ・モンゴル人のダムディンスレンであり、独立宣言をした後、フルンボイルの代表者として6人のバルガ人を連れて外モンゴルへ赴き、モンゴル民族の独立に対するフルンボイルの姿勢と態度を伝えた。さらに、ダムディンスレンはそのまま外モンゴルに残り、ボグド・ハン政権の重臣となり、モンゴルの独立運動に献身した。実際、ダグール人勝福は独立運動の際に重要な役割を果たし、当時ウーレッドの総官であった彼は外モンゴルのボグド・ハン政権より参讚大臣として任命され、フルンボイルもボグド・ハン政権の指示を直接受けるよう

になり、その状態が1915年まで続いた。実際、勝福は命令を出す立場で、地元のモンゴル人を指導していたのはダムディンスレンであった。

その後、ダムディンスレンは外モンゴルに留まり、フルンボイルの政治に直接参加することがなくなったが、勝福は1919年に亡くなるまで最高の地位に付き、フルンボイルの政治的権力を握っていた。フルンボイルの独立が宣言されてまもなく、それをめぐりロシアと中国は自らの立場を示した。1913年10月23日にロシアと中国の間で「露中宣言」が締結され、外モンゴルのみが認められたが、フルンボイルの問題は取りあげられなかった。それはいうまでもなく、フルンボイルに対する両国の態度を示すものであった。このような状況の中で、キャフタ三者会議を前に、1914年4月16日にフルンボイルのモンゴル人代表が会議を開き、フルンボイルが中国と合併するか否かをめぐって討論したところ、勝福と少数の役人がそれを支持した^{*13}。そして、8月26日から、ロシア、中国、モンゴルのキャフタ会議が始まり、1915年5月25日に「キャフタ三者協定」が結ばれ、モンゴルの独立は、外モンゴルのみが自治に格下され、フルンボイルは中国の中に残された。しかし、フルンボイルの官吏たちは、このような結果を直ちに受け入れることができなかった。そのため、6月17日に、中国中央政府は委員を派遣して勝福と交渉し、次の四つの条件を承諾させ、独立の取り消しを説得した^{*14}。

1. 勝福現在の地位は暫く変更せず
2. 呼倫貝爾招集の軍隊は政府に於て管理す

*13 「哈爾賓特派員發 呼倫貝爾合併議討」『朝日新聞』1914年4月19日 朝刊 4P（朝日新聞社 聞蔵Ⅱビジュアル 2020年5月12日 閲覧）。

*14 「奉天特派員發 呼倫貝爾と交渉」『朝日新聞』1915年6月18日 朝刊 2P（朝日新聞社 聞蔵Ⅱビジュアル 2020年5月12日 閲覧）。

*12 郭道甫（1931）126頁。

3. 呼倫貝爾行政上の組織は政府自出に修正す
4. 呼倫貝爾独立後の負債は政府之を支援す

その後、11月6日に中国とロシアの間で「露中声明」が調印され、フルンボイルは「特別区域」として他のモンゴル地域と異なる政治的な道を歩むことになり、勝福は中華民国大総統によってフルンボイル副都統に任命された。ところが、1917年にロシアにおいて革命が起こり、外モンゴルは後ろ盾を失い、1919年に中国により自治が撤回され、フルンボイルの特別区域もそれに続いて取り消された。その際、勝福は中国政府にフルンボイル自治を取り消す交換条件として四項目を挙げたことが当時の朝日新聞の記事から読み取れる^{*15}。四項目を以下に示す。

1. 呼倫貝爾独立以来の負債を支那政府に於て引受けること
2. 勝福を呼倫貝爾の副都統と為すこと
3. 支那政府は呼倫貝爾に軍隊を増加せず
4. 呼倫貝爾の区域内のある軍隊を勝福の管轄に歸する

このように、フルンボイルの政治的な地位をめぐる交渉において、勝福はフルンボイルを代表して参加していた。しかし、彼はフルンボイルの自治を取り消す決定が出される直前に亡くなり、勝福が出した交換条件も無効とされ、フルンボイルは無条件で自治を取り消されることになった。そこで、フルンボイルの副都統に就いたのがダグール人の貴福である。彼は勝福の長兄の子でもあった。フルンボイル特別区域が取消された後、フルンボイルでは「旗県分治」が実行され、大総統に

*15 「北京特派員發 呼倫貝爾自治取消交換条件提出」1919年12月16日15日朝刊 2P（朝日新聞社 聞蔵Ⅱビジュアル 2020年5月12日 閲覧）。

より任命された副都統が蒙旗の管轄にあたり、フルンボイルは黒龍江省に統治された^{*16}。

このように、フルンボイルが一時的な独立から特別区域となり、さらにそれが撤回される過程において、勝福らは清朝の旧制度を固く守り続けた。1732年にバルガ、ダグール、オロチヨンなどの諸族がフルンボイルに移駐させられた時、清朝政府は諸民族の管轄にあたるフルンボイル統領を設け、1743年に副都統に改めた。要するに、副都統はフルンボイルの独自性を象徴する存在であったが、特別区域の撤回に伴い、その実権が削減され、名目上のものにすぎない存在となったのである。

4. 郭道甫（メルセ）とその『呼倫貝爾問題』

郭道甫（メルセ）は、1894年にフルンボイルに生まれダグール・モンゴル人^{*17}である。1910年代末から政治的活動を始めた彼は、フルンボイルばかりでなく、内モンゴルの革命運動にも深く関わり、強い影響を与えた人物であった。20世紀初頭というモンゴル民族の運命がかつてなかった試練を受けている時代に成長した彼は、民族の現在と未来を考え、モンゴルが直面する問題を解決することを考え続けていた。そのために、1923年には『蒙古問題』と『新蒙古』を執筆し、帰郷した有識青年として教育を主張していたが、革命運動に転換し、それが失敗すると改めて教育活動に重点をおくようになった。郭道甫の思想や認識は状況により変わっていた。郭道甫は政治家であ

*16 中共内蒙古自治区委員会党史研究室編、張宇主編（2010）、113頁。

*17 1950年代、中国政府による民族識別の結果、ダグールは「ダグール族」として識別されたが、それまでにはモンゴル民族の一部として意識されていた。ダグールの「民族」として識別される過程や経緯に関して、ユ・ヒョヂョン（2009）を参考できる。

りながら、中国語で論説を執筆し、その中で1931年に出版された『呼倫貝爾問題』は、満洲国以前のフルンボイルの実態を知る上で、基礎的資料になった。

1910年代以来、「特別区域」が取り消され、自治を失ったフルンボイルを、郭道甫は「完全な自治」から「半自治」に入ったと指摘した。いわゆる「半自治」とは、「フルンボイル副都統公署の各旗人民を管理するとその他の内務権が保留されたが、護路、国防、外交、財政権力が黒龍江省当局に掌握される」*18 ことであった。郭道甫はフルンボイルの政治権力者や旧王公らを批判し、革新的な態度を持つ人物であった。フルンボイルの歴史において、ダグール人がその政治権力を握り続けていたが、郭道甫は旧来のダグール人と異なる立場から同地域に影響を与えていた。

1915年に「キャプタ協定」が締結され、外モンゴルは中国宗主権下の「自治外モンゴル」となり、フルンボイルも「特別区域」を獲得した。しかし、外モンゴルとフルンボイルはこれに満足して現状を受け入れたわけではなかった。その協定に不満を抱き、反抗したのが内モンゴル出身のバボージャブだった。彼はモンゴル独立のために戦ってきた人物であったが、残留の部隊を率いて軍事行動を続け、中国軍の急襲で死亡した。このバボージャブ敗残部隊がフルンボイルに入り、再び勢力を糾合し、次第に勝福と対立した。勝福当局は旧バボージャブ部隊により、一旦は追い落とされるが、ロシア軍の援助をえて権力奪回に成功する*19。この時、郭道甫是北京からフルンボイルに戻ってきた。1917年冬、郭道甫と福明泰らは30名のフルンボイル有識青年を招集し、内モンゴル近代史上初めての知識青年組織となる「フルンボイル学生会」を結成した。その後、同「学生

会」が「フルンボイル青年党」に発展し、さらに「内蒙古人民革命党」の成立において重要な基礎を築いた*20。実際、このような歴史の視野から行った郭道甫についての研究は多くなされている*21。従来の「ダグール・モンゴル」は1950年代に中国で行われた「民族識別」により、「ダグール（達斡爾）族」となったため、郭道甫が活躍していた当時、ダグール人は「ダグール・モンゴル人」、つまり、「モンゴル人」意識をもって活動していた。

郭道甫は、『呼倫貝爾問題』（1931）で「過去」、「最近」、「現在」と「将来」の四つの部分から、フルンボイルの歴史と20世紀以来に起きた諸事件と現状、またはフルンボイルと隣接諸国との関係を解析し、フルンボイルの問題を解決する方法を試みた。「過去のフルンボイル」からは、彼の故郷に対する誇りと愛着が十分に伝わる。また、「独立」から「自治」へ、「自治」から「半自治」へと徐々に自治が失われていくフルンボイルの情勢に彼は胸を痛め、このような状況を背景に「地方政治改良」を目指す政治活動を開始した。さらに、『呼倫貝爾問題』（1931）には、1928年にフルンボイルの完全な自治を取り戻すために彼が武装蜂起を指揮したことが述べられている。

本書には「巴爾虎当局」、「巴爾虎人民」、「巴爾虎民族」、「巴爾虎官員」という表現が使われ、ここで「巴爾虎」は、「バルガ人」ではなく、「フル

*20 朝魯門（2017）35-36頁。

*21 奥登掛編（2009）は郭道甫が執筆した「蒙古問題」、「新蒙古」や「呼倫貝爾問題」など、それに加えて郭道甫について書かれた諸論文をまとめ『郭道甫文選』を出版した。これ以外に、曉敏（2009）、周太平（2010）、水谷東洋（2013）、中見立夫（2001）などの研究もある。さらに、内モンゴルの革命運動にも深く関わり、強い影響を与えた人物として、内モンゴル革命史の研究では郭道甫について論述は欠かせない。そうした研究として朝魯門（2017）や哈木格図（2017）などが挙げられる。

*18 朝魯門（2017）64頁。

*19 中見立夫（2001）125頁。

ンボイル」という地域を指す意味で使われていることが同書の趣旨から理解される。実際、バルガ人はフルンボイルの人口の三分の二を占めていたため、当時、ソロン、ダゲールなど他の民族も「巴爾虎」と称され、外部から見た場合も、フルンボイルのモンゴル人はすべて「巴爾虎民族」と認識されていたことが郭道甫自身の書籍にも記述されている。彼は「特にロシアと外モンゴルは『バルガ』で『フルンボイル』を命名していた」と述べている^{*22}。

モンゴル人では支族名でその支族の生活空間を指す習慣があり、支族名が地域名になることが普遍的に見られる。例えば、現在モンゴル国の主な支族は「ハルハ・モンゴル人」であるため、内モンゴルには今も「モンゴル国」を「ハルハ」と呼ぶ習慣が残っている。

そのため、このようなモンゴル人の発想の影響により、ロシア人もフルンボイルのことを「バルガ」と呼んでいたのであろう。したがって、郭道甫がフルンボイルを「バルガ（巴爾虎）」と呼んでいたのもこのようなモンゴル人の習慣によるものであったと考えられる。郭道甫は『呼倫貝爾問題』（1931）で、フルンボイルの歴史や過去の出来事を語る際に「巴爾虎」と記していた。過去の政治運動の経験により、郭道甫の思想や見方が変わり、結局、フルンボイルが求めているのが限られた「自治と民治」であり、中国から独立することではなかったと述べている。彼は中国の中でのフルンボイルの「自治地域」を主張したのである。

このような郭道甫の思想の転換を中見立夫は「『中国』という『国家』を受入、その中での内モンゴル自治を促進する方向へ、つまり『エスノ・ナショナリズム』へとはっきりと転化した」^{*23}

と指摘している。

フルンボイルではモンゴル民族の中でもっとも古い一支であるバルガをもって外モンゴルとの連帯感を作っていたが、革命運動が挫折し続け、フルンボイルの民族としての独自性が失われるにつれて、バルガのエスニシティも弱化され、外部から政治性が強化される中で地域としてのフルンボイルが形成されはじめた。

5. フルンボイルにおける日本人の調査とバルガ

外モンゴルの独立宣言以降、中国とロシアとの力関係により「特別区域」となったフルンボイルに対し、日本の関心は高まりつつあった。

日本人は早くからフルンボイルにおいて幅広く調査を行っていた^{*24}。満洲国は多くの民族が暮らす「独立国」として成立し、実際に、関東軍は漢人以外の諸民族も統治することを建国前より想定していた。関東軍はここにいる諸民族が異なる制度や伝統に拠って生活していることを知っていた^{*25}。したがって、実地調査が満洲国の諸民族を知る上でもっとも有効な方法であると考えられていたであろう。フルンボイルを対象にした調査報告などには、諸民族集団の歴史、衣食住の習慣や伝統などが詳細に記述されていることが多く見られる。

その中でもっとも古い地誌資料としてあるのが、1916年に出版された吉原大蔵の『呼倫貝爾

*24 吉田順一が「日本人によるフルンボイル地方の調査——重荷畜産調査について——」という題目で論文を執筆し、日本人によるフルンボイル調査や報告をまとめ、詳細な説明や分析を行い、重要な情報と参考となった。そこで、最も早くフルンボイル地方を調査したのは、関東都督府の関係者だと、調査成果として『東部蒙古誌草稿』上・中・下及び『東蒙古』があると述べている。1908年と1915年に出版されたものである。

*25 鈴木仁麗（2012）、252頁。

*22 郭道甫（1931）23-25頁。

*23 中見立夫（2001）146頁。

事情』である。同書は実地調査により書かれたもので、現地の民族集団に関して当事者に聞き取り調査を行い、現地の資料を参考にしたと推測される。そして、1920年代からロシア人が書いた資料を翻訳するようになり、また、ロシア人の、あるいは間接的にモンゴル人の認識を取り入れていた調査があった中でよく知られているのは、ア・バラノフの『巴爾噶事情』とコルマゾフの『バルガ（呼倫貝爾）事情』*26である。

コルマゾフはその第一篇の概説で「『巴爾虎（呼倫貝爾）とは北緯四十七度より五十四度まで及び東経百五十度より百二十二度までの間に横たはる黒龍江省西部を指稱する』*27と記し、エスニック・グループとしてのバルガを「チブチン人」か「チブチン・ブリヤート人」と「新ブリヤート人」と称し、「ホーチン（陳）・バルガ」と「新バルガ」を区別していた。

バルガ人は本来「ハラ」という特別な血縁関係を持つ集団であった。「チブチン」とはホーチン・バルガの一ハラであり、人口が多いため総じて「チブチン」と呼ばれていたと考えられる。一方、新バルガを「新ブリヤート人」と扱っていたのは、バルガとブリヤートは民族的に近いであろう。

このように、ロシア人が書いた資料を通して、日本人は「バルガ」という支族名がフルンボイルという地域を指す名称にもなっていたことに気づいていたであろう。

ここに挙げたのは、数多くある資料の一部に過ぎない。翻訳した資料を始め、日本人の調査とその報告書からは、フルンボイルの諸民族集団についてのみならず、フルンボイルの地理的環境、行

政、産業、資源などについても細かな調査が行われていたことがわかる。

それはその後の満洲国建国にとって戦略上の意義をもっていたことは言うまでもなく、フルンボイルと諸民族集団の近代化にとっても日本人の調査は重要な意味をもっていた。

6. 満洲国の「興安北省」としてのフルンボイル

1932年3月に満洲国が建国され、関東軍は、東部内モンゴルとフルンボイルにモンゴル人の特殊行政区として興安省を設置し、興安省の一般行政義務を管掌する中央行政機関として興安局を設けた*28。そのため、フルンボイルでは「特別区域」が取り消された後実行されていた「旗県分治」が撤廃され、興安省の一部となる「興安北省」が設立され、そのもとで旗と市が設置された。それも最初は、「興安分省」だったが、1934年11月29日付勅令第百十二号の公布により、興安総省は蒙政部に、興安分省は興安各省に改められ、興安北分省公署は興安北省公署に改められた*29。それから興安北省として正式に省制度が導入され、フルンボイルは満洲国の興安省に組み込まれた。

それにより、興安北省公署がハイラルに置かれ、省の地理的範囲は、興安嶺の西側、旧フルンボイル副都統管轄の地であり、ソロン、バルガ、ウーレッド、ブリヤート、オロチョンなどの種族を単位とした八つの旗*30から構成し、各旗の区

*28 フフバートル（2002）110頁。

*29 村上竜太郎 編（1952）。

*30 1932年6月に設置された興安北省は、ソロン左翼旗、ソロン右翼旗、新バルガ左翼旗、新バルガ右翼旗、陳バルガ旗、ウーレッド旗、ブリヤート旗、オロチョン記といった八つ旗から構成されていた。そして、翌年7月に、ソロン旗（ソロン左翼旗、ソロン右翼旗、ウーレッド旗、ブリヤート旗四旗を合併）、新バルガ左翼旗、新バルガ右翼旗、陳バルガ旗、エルグネ左翼旗、エルグネ右翼旗と

*26 原著の翻訳は杉原訳（1928）『「バルガ」（呼倫貝爾）事情』と高橋克己訳（1930）『巴爾虎（呼倫貝爾）の経済概観』という二種類がある。

*27 ウェ・ア・コルマゾフ 著 杉原書記生 訳（1928）。



地図2 満洲国における「興安北省」としてのフルンボイルの範囲

出典：宮脇淳子 (2019) 241 頁。

元タイトルは「満洲国 (1932-34 年) から満洲帝国 (1934-1945) 時代」

画が 1933 年に決定された。このように、「バルガ」と呼ばれていた「フルンボイル」はこの時から「興安北省」という名称を獲得し、また、内外モンゴルのどこにも属さずにいたフルンボイルが、満洲国の下で興安東、西、南省からなる「東部内蒙古」に統合されたことになる。それにより、歴史的に牧草地を共用していた外モンゴルとは「モンゴル人民共和国」と「満洲国」との国境で切り離された。それにより、バルガは、1939 年にソ連・モンゴル人民共和国と日本・満洲国間の国境紛争で知られる「ノモンハン事件」の戦場となり、バルガのエスニシティはさらに失われ、満洲国の近代の行政の一部をなす地域としてのフルンボイルの形成が加速された。

「ノモンハン事件」に関してフルンボイルのモンゴル人、特にバルガ人は満洲国の国民として、不本意でありながらそれまでに牧草地を共用して

いた「ハルハ」との戦争に加わらなければならなかった。特に、ノモンハン一帯に遊牧するバルガ人はハルハ方言を操る人たちであるため、この戦争がバルガ人に与えた衝撃は想像を絶するものであった。つまり、「ノモンハン事件」(モンゴル国では「ハルハ河戦争」)におけるモンゴル人民共和国側の勝利は本国にとっては独立を守る上でたいへん有意義であった。一方、フルンボイル、特にバルガ人にとっては自分たちがハルハ人とは異なる「満洲国の一部」であることを強く押し付けられた象徴的な出来事であった。そのために、1945 年 8 月、モンゴル人民共和国とソ連の連合軍がフルンボイルを日本の占領から解放した際、以前から外モンゴルとの統合の意志が高かったフルンボイルから 265 戸 945 人^{*31}のバルガ人が国境を越えてモンゴル人民共和国に移住した。しかし、移住したバルガ人は満洲国で日本軍に協力し

いう六旗に再編された(中共内モン自治区委員会党史研究室編, 張宇主編, 2010, 135 頁)。

*31 田淵陽子 (2014)。

たという罪名で男性のほとんどが逮捕された*32。

第二次世界大戦終戦後、1945年10月に「興安北省」領に「フルンボイル自治省政府」が誕生し、翌年3月に同政府は「フルンボイル臨時地方自治政府」に改称され、独自の自治の道を歩みながら、1948年10月に、内モンゴル自治政府（1947年5月成立）と統合し、同自治政府の「フルンボイル盟」となった。さらに、1949年10月1日の中華人民共和国成立により、フルンボイルは「内モンゴル自治区」の「フルンボイル盟」となり、2001年に「フルンボイル市」となった。

7. まとめ

フルンボイル（呼倫貝爾）は中華人民共和国内モンゴル自治区の一地域で、主体民族はバルガである。モンゴル民族の一支族であるバルガの民族名称がどのような経緯でそのエスニシティを失い、政治性が強化される中で行政名称化され、それによりバルガは地域としての「フルンボイル」に変化したのか。本稿では、清朝時代から満洲国時代におけるフルンボイルの歴史を概観することにより、フルンボイルの地域形成について考察した。

中華人民共和国建国以降、その民族政策により、フルンボイルの多民族性が強調されてきた。しかし、20世紀前半のフルンボイルではバルガ人とダグル人々がフルンボイルの政治において主導的な立場にあった。それにもかかわらず、フルンボイルは「バルガ」と認識され、エスニック・グループ名としての「バルガ」が地域としての「フルンボイル」を指す意味でも広く使われてい

た。それはフルンボイルの民族構成の中で、バルガ人が多数を占めていた事実を反映するものであった。しかし、20世紀初頭から始まったモンゴル民族の独立運動の中でフルンボイルのモンゴル人が劣勢になるにつれ、モンゴル人の主導性が次第に失われ、それによりバルガのエスニシティが喪失されはじめた。特に、満洲国の建国により、フルンボイルに近代的な行政が導入され、それがフルンボイルの地域形成を加速させた。本稿の考察では第二次世界大戦の終了により、満洲国の「興安北省」領が「フルンボイル自治省政府」となり、それが1948年に現在の内モンゴル自治区の前身であった内モンゴル自治政府の「フルンボイル盟」となり、清朝時代以来、モンゴル民族の一支族である「バルガ」の名で知られていたフルンボイルが地域としてのフルンボイルになったことが明らかとなった。

参考文献

日本語

- JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B02130300100, ア・バラノーフ著、平田稔訳(不明)『巴爾噶事情』外務省政務局 (外務省外交史料館)
- JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B03050701800, 調査書合纂 第一巻 (1-6-1-70_001) (外務省外交史料館) 吉原大蔵 (1916)『呼倫貝爾事情』外務省政務局
- JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B02130082300, 最近支那関係諸問題摘要 (第五十六議会用) 第二巻ノ二 / (山東, 武器, 其他諸問題) (亜一-1) (外務省外交史料館)
- 南満洲鉄道株式会社総務部調査課編 (1931)『露亜經濟調査叢書 第83編』昭和6年 大阪毎日新聞社
- ウェ・ア・コルマゾフ著、杉原訳 (1928)「バルガ(呼倫貝爾)事情」『滿蒙政況関係雜纂/呼倫貝爾ノ部 第二巻』在哈爾濱日本帝國總領事館
- オウエン・ラティモア、後藤富男訳 (1934)『滿洲に於ける蒙古民族』善隣協會
- 暁敏 (2007)「文化的変容からみたダフル族」『漢族・

*32 これらの人たちが、モンゴル人民共和国国籍を取得し、モンゴル国ドルノド・アイマグに「フルンボイル・ソム」という自らの行政区を設立することができた。これに関して、モンゴル国のバルガ研究者 Г. Мянгарсамбуу (2018) の研究を参照にしたい。

- 少数民族研究の接合——クロスオーバー的視点からみる漢族と少数民族の社会と文化——『国際シンポジウム報告書 愛知大学国際中国学研究センター 108-114 頁。
- 暁敏 (2008) 「近代におけるダフル人の政治活動——そのアイデンティティに関する一考察」『中国研究月報』(2) 中国研究所 3-19 頁。
- 暁敏 (2009) 「満洲国成立前のフルンボイル青年党の動き」『中国 21』Vol. 31 愛知大学現代中国学会 71-86 頁。
- 謝永梅 (2013) 「内モンゴルフルンボイル地域における多民族社会の構造について——大興安嶺を中心として——」ボルジギン・ブレンサイン編著『ユーラシア内陸乾燥地文明研究 多様化するモンゴル世界 I』名古屋大学文学研究科比較人文学研究室 95-118 頁。
- 鈴木仁麗 (2012) 「満洲国と内モンゴル——満蒙政策から興安省と内へ——」明石書店
- ソーハン・ゲレルト (2013) 「フルンボイルにおける牧畜民のコミュニティと遊牧文化——ホーチン・バルガのハラを事例に——」『国際文化研究所紀要』vol. 19 昭和女子大学国際文化研究所 19-26 頁。
- 田中文一郎 (1927) 「呼倫貝爾／呼倫貝爾内地旅行視察復命書進達ノ件」『滿蒙事情関係雜纂 第一卷』1927 年 8 月 26 日 在満洲里日本領事館
- 田中克彦 (1990) 『草原の革命家たち：モンゴル独立への道』中公新書
- 田中克彦 (2009) 『ノモンハン戦争 モンゴルと満洲国』岩波書店
- 田淵陽子 (2014) 「『シンバルが左翼総管衙門文書』三種 (1945 年 9-10 月) について」『東北アジア研究』18 巻, 125-159 頁。
- 中見立夫 (2001) 「ナショナリズムからエスノ・ナショナリズムへ——モンゴル人メルセにとっての国家・地域・民族——」毛利和子編『現代中国の構造変動 七 中華世界——アイデンティティの再編』東京大学出版会 121-149 頁。
- 哈木格図 (2017) 「内モンゴル民主主義運動の研究 (1924 年～1937 年)」博士論文 広島大学大学院総合科学研究科
- フフバートル (2002) 「モンゴルにとっての満洲」『満洲とは何だったのか (環—歴史・環境・文明)』学芸総合誌・季刊 Vol. 10 藤原書店 106-115 頁。
- フフバートル (2012) 「『内蒙古』という概念の政治性」、『ことばと社会』No. 1, 三元社, 40-52 頁。
- フフバートル (2015) 「内モンゴルにとっての 1945 年 8 月——特集な政治的環境における独自の終戦史——」昭和女子大学『学苑』898 号, 22-40 頁。
- 藤田藤一 (1938) 「陳巴爾虎蒙古族」満洲行政学会『内務資料月報』2 (2) 満洲行政学会 32-41 頁。
- 満鉄経済調査会 編 (1936) 「ブリヤート民族の研究」南満洲鉄道経済調査会
- 南満洲鉄道哈爾濱事務所調査課編 (1927 年) 『政治的方面より見たる呼倫貝爾事情』南満洲鉄道哈爾濱事務所調査課
- 宮脇淳子 (2019) 『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』増補新版 刀水書房
- 村上竜太郎 編 (1952) 「東部蒙古調査資料集」出版社不明
- 柳澤明 (1993) 「新バルガ八旗の設立について——清朝の民族政策と八旗制度をめぐる一考察——」史学会『史学雑誌』102 巻 3 号, 369-403 頁。
- 柳澤明 (1999) 「ホーチン=バルガ (陳巴爾虎) の起源と変遷」『社会科学討究』44 巻 3 号, 345-369 頁 早稲田大学アジア太平洋研究センター 345-369 頁。
- 吉田順一 (1999) 「日本人によるフルンボイル地方の調査——おもに畜産調査について——」『早稲田大学大学院文学研究紀要』45 巻 早稲田大学大学院文学研究科 57-69 頁。
- 陸軍省調査班編 (1932) 『呼倫貝爾事件に就て／呼倫貝爾の概観』陸軍省調査班
- ユ・ヒョジョン (1999) 「中国内モンゴル自治区の多民族世界——フルンボイル盟における民族的生活の枠組みと変容——」和光大学モンゴル学術調査団『変容するモンゴル世界——国境にまたがる民——』新幹社 140-194 頁。
- ユ・ヒョジョン (2002) 「満洲とは何だったのか」『満洲とは何だったのか (環—歴史・環境・文明)』学芸総合誌・季刊 Vol. 10 藤原書店 174-182 頁。
- ユ・ヒョジョン (2009) 「ダグールはモンゴル族か否か——1950 年代中国における『民族識別』と『区域自治』の政治学——」ユ・ヒョジョン, ボルジギン・ブレンサイン『境界に生きるモンゴル世界——20 世紀における民族と国家——』八月書館 115-273 頁。
- イミン (2019) 『20 世紀におけるバルガ・モンゴル人の

民族と国家——マンライバートル・ダムディンスレンに対する評価から——』昭和女子大学大学院修士論文

新聞

- 「新京特派員発 興安北省長決定」『朝日新聞』1936年6月10日 朝刊 2P (朝日新聞社 聞蔵Ⅱビジュアル 2020年5月11日 閲覧)
- 「哈爾賓特派員発 呼倫貝爾合併議討」『朝日新聞』1914年4月19日 朝刊 4P (朝日新聞社 聞蔵Ⅱビジュアル 2020年5月12日 閲覧)
- 「奉天特派員発 呼倫貝爾と交渉」『朝日新聞』1915年6月18日 朝刊 2P (朝日新聞社 聞蔵Ⅱビジュアル 2020年5月12日 閲覧)
- 「北京特派員発 呼倫貝爾自治取消交換条件提出」1919年12月16日 朝刊 2P (朝日新聞社 聞蔵Ⅱビジュアル 2020年5月12日 閲覧)

モンゴル語

- Галjud Түбсінним-а (2013), Барγуүд-ун теүкен ирелте, Көлүн Boyir-ун Барγу Buriyad ögeled-үн теүкен ирелте, öbür Mongγul-ун соγул-ун keblel-үн bölüglel.
- Г. Migmersambuу (2007), Барγу-ун ерке чилүен-ү темечел, negüdel sayudal, Улаγанбайатур
- Г.Мягмарсамбуу (2018a), Баргын түүх, угсаатны зүй, Баргын түүхэн товчоон 1734–1960 он, тэргүүн боть, Улаанбаатар
- Г.Мягмарсамбуу (2018b), Баргын туух, соёлын угсаатаны зүй, гутгар бодь, Цэргийн жанжин Манлай баатар Дамдинсүрэн 1871–1921 он, Улаанбаатар
- J.Öljei (2012), Барγу mongγul-ун теүке, Öbür mongγul-ун

soγul-ун keblel-үн qoriy-a.

中国語

- 李・蒙赫達賚 (2004) 『巴爾虎蒙古史』, 内蒙古人民出版社
- 朝魯門 (2017) 『自治与革命: 内蒙古人民革命歷史研究』 (博士学位論文) 内蒙古大学
- 定宜庄 (2003) 『清代八旗駐防研究』, 遼寧民族出版社
- 郭道甫 (1931) 「呼倫貝爾問題」, 上海大東書局, 奥登掛編 (2009) 『郭道甫文選』, 内蒙古文化出版社, 121頁 -158頁
- 盧明輝 (1990) 『清代蒙古史』 天津古籍出版社
- 孟和宝音 (2010) 『近代内蒙古行政建制變遷研究』, 遼寧民族出版社
- 内蒙古自治区档案馆編 『内蒙古自治運動連合会——档案史料選編——』 档案出版社
- 内蒙古自治区政協文史和學習委员会編 (1997) 『内蒙古自治政府成立前後』, 内蒙古文史資料第五十輯, 内蒙古政協文史書店
- 奇文瑛 (2001) 「清代呼倫貝爾的两次移民与得失」, 中国社会科学院中国边疆研究所 『中国边疆史地研究』 10卷1期,
- 燕京, 清華, 北大 1950年暑期内蒙古工作調查团編 (1997) 『内蒙古呼納盟民族調查報告』 内蒙古人民出版社
- 中共内蒙古自治区委员会党史研究室編, 張宇主編 (2010) 『内蒙古建制沿革概覽』 内蒙古人民出版社

(イミン 生活機構学専攻 2年)

受理年月日 2020年9月30日

審査終了日 2020年10月30日